

2006年の活動が始まりました

2006年の活動はセイルメルボルンへのオーストラリア遠征からでした。470男女、レーザー、ラジアル、49er、RSXの各クラスでエントリーをし、日本は海外からの参加艇の中で22艇と、ダントツ1位だったそうです。RSXクラスはこの大会をNTクラス別ランキングの対象にする予定でしたが、参加国数が規定に足りなかったため、対象大会にはなりませんでしたが、しかし、グレード1の国際大会であり、しかも、北京五輪から導入されるメダルレースの記念すべき最初のイベントでしたから、手ごたえは十分でした。

日本チームは470女子で吉迫・大熊組（ベネッセ）が優勝しました。メダルレースでは1点差で2位から始まり、マークを回るごとにオーストラリアとの順位が入れ替わる大接戦でしたが、最後のマークで内側をとったオーストラリアがブローチングしている間に大外を回って先にフィニッシュしたベネッセチームが勝ちました。現場ではオン・ザ・ウォーターのジャッジをしていましたから、オーストラリアがあげたプロテストフラッグにもジャッジが旗で結果を出していました。フィニッシュラインを笑顔で通過した吉迫に、「ケースはOKだから、優勝！」と声をかけてあげることができました。以前のシステムなら、そこからプロテストが始まり、審問が終わってからでないと結果がでませんでした。このシステムなら、勝った人が勝ち、フィニッシュラインで勝者が決まるのです。10艇のレース艇に対して2-3艇の審判艇がいましたから、まずまずのジャッジぶりでした。その結果がどうであろうと、審問室で決まるよりも、その場で決まったほうがフェアだと思います。ただし、審判はかなり訓練されていかないと、難しいでしょう。当分の間はグレード1の大会に限られてしまうのも仕方がないと思います。

470男子は関・柳川組（関東自動車工業）がメダルレースでトップをとり、2位になりましたが、49erの轟・高橋組（関東自動車工業）は僅差で敗れて優勝を逃してしまいました。RSX級女子の小菅も最終日であがって3位、470女子の近藤・鎌田組（チームアビーム）もメダルレースでトップをとり3位に入りました。



審判艇は初のメダルレースなので
気合が入っていました



海外レース初優勝の吉迫（右）と大熊（中央）

49erの轟・高橋はセイルメルボルンよりも前にシドニーインターナショナルレガッタからオーストラリアに入り、12月の最初から練習を積んでいましたが、セイルメルボルンの後にマクレーで開催されたオーストラリアチャンピオンシップに参加してから帰国しています。また、470の関・柳川組、吉迫・大熊組、井嶋・加藤組（東亜建設工業）はメルボルンからコンテナをパースへ送り、フリマントルで開催されたオーストラリア選手権に参加しました。関・柳川組はワールドチャンピオンのウィルモット・ペイジ組やワールド4位のベルチャー・ベーレンス組との勝負で技術的な差を分析して、考える、よい機会となりました。また、女子もオーストラリアは強風が強く、吹いた中で張り合っている吉迫、井嶋、ローレン、レチチの4艇がどんどん力をつけていくのも見ごたえがありました。吹いた中で

走るだけでなく、レースをすること、そしてレースで競り合う中で本当の力がついていくことを実感してください。関・柳川も強風でのボートスピードに対して、新たなる挑戦が始まりました。コンテナは日本に送り返し、次はヨーロッパ遠征になります



中村健次さん撮影 — オーストリアは吹きました！この風を求めて練習にいったかいがありました。

